

令和2年度農林水産祭天皇杯等の選賞

令和2年10月6日に開催された農林水産祭中央審査委員会（会長 難波成任氏）第2回総会において、令和2年度（第59回）農林水産祭における天皇杯受賞者、内閣総理大臣賞受賞者、日本農林漁業振興会会長賞受賞者が決定した。表彰は、勤労感謝の日（11月23日）に明治神宮会館で開催の農林水産祭式典において行われた。

1. 農林水産祭の概要

農林水産祭は、国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるため、農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会の共催により昭和37（1962）年から実施されている。

天皇杯、内閣総理大臣賞及び日本農林漁業振興会会長賞は、過去1年間（令和元年7月～令和2年6月）の農林水産祭参加表彰行事（273件）において、農林水産大臣賞を受賞した465点の中から決定された。各賞は、農産・蚕糸部門、園芸部門、畜産部門、林産部門、水産部門、多角化経営部門、むらづくり部門の7部門に授与される。また、女性の活躍が著しい2点に対して、内閣総理大臣賞と日本農林漁業振興会会長賞が授与される。

酪農関係では、滋賀県蒲生郡竜王町の有限会社古株牧場が天皇杯（多角化経営部門）、静岡県富士宮市の佐々木 剛・佐々木 千尋氏が内閣総理大臣賞（畜産部門）、北海道枝幸郡枝幸町の石田 幸也・石田 美由紀氏が日本農林漁業振興会会長賞（畜産部門）を授与される（表参照）。

2. 天皇杯受賞者：有限会社古株牧場（代表 古株治明）

部門間等の連携と乳製品の商品開発による“湖華舞”ブランドの確立

（1）受賞者の経営

有限会社古株牧場は先代からの水稲＋酪農に加え、平成9年から6次産業化（乳製品加工）の取組を開始した。平成16年に法人化、平成17年に肉用牛肥育部門を導入し、部門間等の連携と肉用牛肥育、乳製品加工部門の事業拡大により、リスク分散を図りながら経営の発展を図ってきた。現在、常雇い・臨時雇いを含め27名の雇用を地域に創出している。

（2）受賞者の特色

1）部門間等の連携と肉用牛肥育部門の飼養頭数の増加・牛肉輸出

水稲、酪農、肉用牛肥育に自家生乳を用いた乳製品の加工・販売を加えた多角化経営を展開している。「牛ふん堆肥の水田への還元」「収穫後の稲わらを乳用牛、肉用牛への粗飼料として活用」「自社牧場の生乳を使用した乳製品の加工・販売」など部門間や地域耕種部門との連携を推進してきた。また、肉用牛肥育部門では、補助事業とABL（動産・売掛金担保融資）等を活用した飼養頭数の増加と、滋賀県の平均を上回るA4ランク及びA5ランク以上の出荷比率を実現するなど、高品質牛肉の輸出にも取り組んでいる。

2）6次産業化への取組

早くから乳製品を生かした6次産業化に着目し、地域の農業者の先駆けとして、ソフトクリームやジェラート、ピザ、チーズなどの加工販売や

表 令和2年度農林水産祭天皇杯等受賞者（酪農関係）

	部門	出品財	受賞者		表彰行事
			住所	氏名等	
天皇杯	多角化経営	経営 （6次産業化）	滋賀県蒲生郡 竜王町	株式会社古株牧場 （代表 古株治明）	令和元年度全国優良 経営体表彰
内閣総理大臣賞	畜産	経営 （酪農）	静岡県富士宮市	佐々木 剛* 佐々木 千尋*	第37回全農酪農経営 体験発表会
日本農林漁業振興会 会長賞	畜産	技術・ほ場 （放牧）	北海道枝幸郡 枝幸町	石田 幸也* 石田 美由紀*	第6回全国自給飼料 生産コンクール

注）氏名等の欄に*を付したのは、夫婦連名で授与されるもの。

直売店舗の運営などの取組を開始し、主要な事業部門の1つにまで発展させた。商品については、自社ショップ「湖華舞」をはじめ、直売店2店舗のほか、有名ホテルや百貨店等でも販売され、古株牧場のブランドの確立とその位置付けを確固たるものにしていく。

(3) 普及性と今後の発展方向

古株牧場の取組は県内畜産農家にとって刺激となり、県内において6次化産業に取り組む者が増加するなどその波及効果は大きい。今後は、各部門のさらなる発展を図るとともに、従業員に快適に働いてもらうための就業環境の整備も進めている。

3. 内閣総理大臣賞受賞者：佐々木 剛・佐々木 千尋氏

「都府県型放牧酪農」による牛と人にやさしい高位安定経営

(1) 受賞者の経営

佐々木 剛氏は、昭和35年設立の富士丸西牧場の3代目であり、平成17年に経営を移譲された。カウコンフォートを重視した都府県型酪農経営を進め、年間の1頭当たり平均乳量10,000kg以上の生産を15年以上継続している。生乳は、専務取締役として経営に参加する(株)富士の国乳業を通じて富士地区80校の学校給食向けに供給している。また、飼料コントラクター(収穫作業、土壌改良工事等の受託組織)を設立・運営すると同時に、地域の食育活動にも取り組んでおり、畜産振興に邁進している。

(2) 受賞者の特色

1) カウコンフォートに配慮した都府県型放牧酪農

107頭の牛から高品質な生乳を年間約1,000トン生産する優良経営であり、放牧を上手に活用し、快適な牛舎内でのきめ細かな飼養管理により牛のストレスを制御して穏やかな牛群を作り、牛による作業事故5年間ゼロを達成している。

2) 安心して働ける職場環境

家族、従業員の牧場内での作業分担が明確化され、各種作業のマニュアルの整備等も図られている。小さな事故に対しても情報共有がなされ、業務の改善に活かされている。また、従業員に対しては働きやすい環境作りを進めている。労働1日8時間以内を徹底するとともに、1人1休憩室やシャワールーム等の整備、各種休暇、昇給・賞与、11種の手当など、ゆとりのある労働と充実した賞与・福利厚生に取り組んでいる。

3) 女性の活躍

千尋氏は、剛氏の共同経営者の役割を担うほか、静岡県農山漁村ときめき女性会員として活躍し、地域の学校行事や地区行事運営に参加するなど幅

広く活動している。

(3) 普及性と今後の発展方向

乳質・乳量のみならず放牧に適した牛の改良や、堆肥をフル活用した計画的な草地管理、良質なサイレージの生産技術、1頭1頭を良く観察したきめ細かな牛の飼養技術などに立脚した高位安定経営は、理想的な都府県型放牧酪農経営モデルと評価できる。今後、(株)富士の国乳業を通じた消費者からの信頼に基づく、経営の発展や更なる地域貢献も期待される。

4. 日本農林漁業振興会会長賞受賞者：石田 幸也・石田 美由紀氏

究極の資源循環型酪農 — 牧草だけで超低コスト牛乳生産 —

(1) 受賞者の経営

石田夫妻は、資源循環型の放牧酪農を目指して平成7年に枝幸町へ入植し、採草地も含め化学肥料の無施肥を平成17年に、成牛への濃厚飼料無給与を平成25年に達成した。牛乳生産費を北海道指標の半分以下の水準に引き下げることで、高い収益性を実現している。また、放牧研修会を主催し技術普及にも努めている。

(2) 受賞者の特色

1) 牧草だけからの生乳

高品質な牧草生産、放牧適性の高い牛群管理等により、牧草のみで1頭当たり年間乳量5,440kgと放牧主体のニュージーランド酪農の4,150kgを上回り、乳脂率も4.2%と高い飼養体系を確立した。飼料代、労働時間などの大幅な削減により、牛乳生産費は北海道指標の半分以下となっており、所得率は北海道指標を大幅に上回り、ゆとりある高い収益性を実現している家族経営である。

2) 自然循環に基づく自給飼料生産

石田夫妻は地域環境保全への認識が高く、草地に化学肥料を用いず、堆肥、発酵処理したふん尿、貝化石、炭カルを施用する低コスト自給飼料生産を行っている。放牧地の牧草密度は高く、また牛の嗜好性が高いマメ科牧草の割合が高く維持されている。

3) 地域への貢献

幸也氏は平成15年に「もっと北の国から楽農交流会」を設立して、代表として研修会等を開催し、新規就農希望者の支援に努めている。

(3) 普及性と今後の発展方向

酪農経営の課題である飼料自給率向上、労働時間の低減の先駆的モデルとして、国際競争力にも十分に対応できる生産システムであり、土地制約の少ない地域における低投入で持続的な生産技術として発展することが期待される。